

<資料紹介>シリーズ『青松』を読む⑭

手づくりで感謝と感激とを

——国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用において——

阿 部 安 成

2015/4/5 瀬戸内海に霧

§

手書き手づくり『青松』第 16 巻は、裏表紙が欠け、厚紙による表紙は残り、その右端にはしっかりと和綴じの穴と紐がある。表紙には、その中央に左から右への横書きで「青松」の 2 文字が、その下にはやはり左から右への横書きで「拾六巻」の 3 文字が、標題の右に縦書きで「昭和二十一年一月発行」と筆で記されている。1945 年を旧年としておくと、あたらしく 1946 年が明けた。表紙の文字の横書きが、左から右への新様式にかわった。

表紙を開くと、赤インクで柁目が印刷された原稿用紙に「田中先生／三浦様／特別感謝号」と縦書きでの記載があり、その左には標題と発行年月が記されていたとおもわれるも、千切れてしまったそこには、「青松」の文字がその半分だけみえる。そのつぎには、整列した人びとを撮った記念写真が綴じられている。そのつぎにもまた写真——ひとりの人物の肖像写真、そのつぎの写真は、おそらく芋を撮り、台に載るその向こうの壁には「一株十三個／ニメ四百匁」と記された貼りがみえる。

ついで、柁目謄写版（ガリ版）刷りの原稿用紙に記された「目次」——

◎ 青松第十六巻 目次／写真、／巻頭言／田中先生／三浦様 土谷勉（／誠心には真
心で（議長）熊野梅香（七）／平素の感謝を筆に代へて（副議長）松本音松（九）
／恩恵の数々 久我剛（一一）／感謝（園長）野島泰治（二）／感謝の辞（総代）
石本俊市（四）／感謝に代へて 笠居誠一（／短歌作品／岩瀬、小見山、赤沢／斉木、
笠居、浅山／泉、綾井、／俳句作品／大原、多田、久我／香山、笠居、大田井／辻、喜
田、上野／藤田／子供の四季 浅野繁（四三）／綴方 赤松、山上、中井、岡崎／青松
十五巻／短歌／俳句／合評会／誠一（五一）／枝風（五四）／詩、みなし児、斉木操／
歳末弁（蕪村より） 笠居誠一（／同人各位へお報せ／園内作業状況（一二）／餅
つき（二三）／句友 頑張れ（四〇）／田中先生の御言葉（四二）／張切る児童
（四九）／短歌作品目次（二四）／俳句作品目次（三五）／あとがき（五八）／
以上

本文冒頭の「巻頭言」は土谷勉が執筆——「田中先生／三浦様／日頃の御厚情を思へば、
何ともお礼の言葉がありません。実に感謝の極みです。応ふるにこの一卷は余りに貧弱す
ぎます。執筆者も数ふるばかりしか居りません。然し、世には選ばれた人といふ言葉が
あります。よしこの一卷は不行届勝であらうと、それは執筆者一同の罪でありまして、病
友五百有余人、青松園挙げて捧ぐ衷情が、この貧しい一卷を通し、いさゝかでも汲んでい
たゞければ望外の幸であります。勉」。

土谷稿が記された原稿用紙には、本巻のページノブル①が手書きでみえる（欄外左上
端。このあとページノブルには〇がついたりつかなかったりする）。本巻の扉というべき
紙片の記載のとおり、この第 16 巻は「田中先生／三浦様」の両名に捧げられている。

まず、園長野島泰治の稿「感謝」が、その題目のとおり意思を示す（同稿のページノ
ブルは綴じられた原稿用紙の順に、1 枚めは 2[＝]欄外左上端、2 枚めは 2[＝]欄外右上端、3
枚めは 3[＝]欄外左上端、4 枚めは 4[＝]欄外右上端。以下おなじくページノブルを示す。原稿
用紙には「大島療養所」の印刷文字）。戦時下では、「園での物資補給獲得にはどれだけ苦
心があつたか知れない、それだけに戦時中に於ける患者生活には筆紙に尽せない苦難が多
かつた。」とふりかえるなかで、「或る軍人」の言も想起された——「「癪病患者も一人揃に
配給米を受けてゐるのであらう、勿体ないことだ、癪病患者など此の際殺してすへ」と放
言したので、「そんな考へを持つてゐる軍人がゐるから戦争は敗けて来るんだ」と応酬した
ことがある。この軍人のみならず一般人の中にもこれ程極端ではない迄も似たり寄つたり

の考へを持つてゐたものは非常に多かつた。」。

「軍人」であれ「一般人」であれそうした「考へ」があるなかで、「兎にも角にもどうかこれを切り抜けることの出来たのは、職員の努力もさることながら、患者の時局に対する認識と其の忍耐と、更に病者の生活に心からなる理解を持たれた一部社会の篤志家のあつたためと云ひ度い。殊に大島青松園の患者に取つては、とりわけ田中文男、三浦幾次郎氏両先生のあつたことを忘れてはならない」と、本第 16 巻を「感謝号」として献呈する相手の名が示された。では、両名はどういう人物か。

田中については、同人と「大島との関係を知らない人は先づあるまいから、詳しい事は省略する。」として、「引率者が必要とあらば、大学教授であつたときでも患者慰問のためには多数の芸者をわざわざ岡山からつれて来て下さ」ったこと、「御開業なさつて御忙しい時でも暇を作つては御家族を皆おつれして下さい」ったこと、「病者には言ひ難い様な話でも、又解り難い様な話でも、慈父の如く慈母の如く遠慮なく極くわかり易く打ちとけて話して下さい」ったこと、そうしたことによって「どれだけ病者達が慰められたことか、他の如何なる演芸映画にも勝つて感謝に堪へないものであつた、」と園長は同人の慈しみをみせ、それを讃えた。

田中には「曾つて各知人に贈られた「大島療養所訪問記」との著作があり、それが「格別の反響を呼んで故湯浅〔倉平——引用者による。以下同〕内大臣から数回に及んでの雑誌図書の御寄附を受けたのも三浦幾次郎先生との縁の出来たのも、皆其の賜である」し、くわえて、「先生が大学在職二十五年祝賀の節、門下生から奉つた献金の大部分を貧困患者の救助金として御寄附を戴くなど、御礼の言葉は尽きない。」との厚誼とそれへの謝意が示された。

そこにあげられた著作の正確な書誌情報をあげると、田中文男『大島療養所を訪問するの記』（田中文男、1935 年）である。同書は、大島青松園キリスト教霊交会教会堂図書室と国立国会図書館東京本館（同館デジタルコレクション）とにある（また、藤野豊編集、解説『編集復刻版近現代日本ハンセン病問題資料集成』戦前編補巻 4、不二出版、2004 年、に収載）。

その田中にかかわって「縁の出来た」という三浦幾次郎は、愛媛県新居浜近く垣生村の人、曾つては県会議員にもなられた徳望家である、其の昔、乳嘴突起炎で危篤のとき、田中先生が岡山からわざわざ往診手術をされて助けられたと

云ふ御縁のある方で、田中先生の御家族と御一緒に御慰問して戴いたこともある。／田中先生を介して度々互助金の御寄附を受けたことは病者諸君のよく知れるところで、又今回今後二十年間方として一万二千円と云ふ莫大な互助金の御寄附を戴いたのである。／御手紙によれば御母堂と御令息を失はれたる由、御孝心殊の外深き三浦様の御嘆きの程も察せられる。御家族の上にも又終戦と共に御事業の上にも御心配一方ならぬ時、病者のために此の特別な御交配を頂いたことは、誠に有難い限りである、

とこれまたその「御寄附」や「御交配」に、大島の療養所在住者が謝すべきひとであった。つづく、「此の両先生の御蔭に依つて出来た園内の記念農園で時局下どれだけ食糧の不足を補ひ得たか知れない、最近一つのツルに十三個二貫四百匁の芋の出来たのも、此の記念農園であつた、温かい人の情が受けた病者の丹精でかくも立派な実を結んだわけだ」との園長の謝辞はまた、本巻冒頭の写真の説明でもあった。

1枚めの集合写真の最前列中央が田中で、その両脇に同人の妻と子なのだろう、そして列の右端の男が野島園長である。2枚めの肖像写真が、三浦のそれだろう。写真3枚めの芋は、「温かい人の情け」が「病者の丹精でかくも立派な実を結んだ」その証ということだ。写真にみえる貼り紙に記された「一株十三個／ニメ四百匁」と、園長がいうところの「一つのツルに十三個二貫四百匁」が一致する。

園長の稿は、「大島療養所」の文字が印刷された原稿用紙に記されていた。

§

総代石本俊市の稿「感謝の弁」は、柘目謄写版刷り原稿用紙に記されている（ページノ
ンブルは、4[＝]欄外左上端-1[＝]欄外右上端、2[＝]欄外右上端、5[＝]欄外左上端-3[＝]欄外右上端、4[＝]
欄外右上端、6[＝]欄外左上端、6[＝]欄外右上端）。その末尾の記述——「二〇・一二・二七・急
稿」からは、年末の慌ただしい執筆だったようすがうかがえる。

石本は稿の冒頭で、「外部との唯一のつなぎでありました藻汐草が昭和十九年七月休刊に
なりましてからは、大島の消息を外部のお方にお知らせする機関がなくなり、それかとい
つて通信も郵便資材の都合により、之亦意にまかせず失礼ばかり致して居る有様でござい
ます。」と書き始め、末尾をもまた、「藻汐草休刊後、土谷君とその外有志の努力により園
内廻覧誌“青松”を発行し原稿用紙も反古紙その他凡て自弁自筆で持ち寄り、それをまと
めて回覧致し文芸に精進致してゐます。その“青松”を今号は田中先生並に三浦様に捧ぐ

る感謝記念号として編輯致しました。／時局柄謄写版りもできませんので清書して頂きお贈り致すことにしました。洵に貧弱なるものではありますが、筆紙につくし得ない私達の大きく深い感謝と感激とを編み込みましたこの“青松”により私達の微意をお汲みとり下されば望外の喜びでございます。」と結んだ（二重下線は引用者による）。

大島の在園者にとっては、それほどにその編集と制作に没頭し、できあがったそれを大切にしてきた『藻汐草』とそれを継ぐ手書き手づくり『青松』であり、そこに「私達の大きく深い感謝と感激とを編み込」めたことをよろこんでいるようすがあらわれている（二重下線同前）。手書き手づくり『青松』は、「原稿用紙も反古紙その他凡て自弁自筆で持ち寄り、それをまとめて回覧致し文芸に精進致してゐます」「園内廻覧誌」なのだ。そこに綴じられた石本の原稿は、だれの手によるかは不詳ながらも、一枘ひとますに、ていねいに、しっかりと、文字一つずつが書かれている。

石本は、このかんの「藻汐草休刊以来僅か一ケ年余りの間の国内情勢の急激な大転換や戦災等によつて御住所不明の先生方も沢山あります。」なか、田中の「御消息すらも知ることができず蔭ながらお案じ申してゐ」て、「あの岡山市空爆のときも私達が一番心配になつたのは“田中先生とそのおうちはどうだらう”とのことでありました」との心中を明かす。

まえの稿で園長もふれていた岡山の空襲とは、「1945 年 6 月 29 日未明〔中略〕2 時間にも及んだ爆撃」で、「市民の 100 人に 1 人以上の割合で犠牲になったことになる。〔中略〕被災者は 10 万人を越えた。／また、中心市街地の 70% 近くが焼失し、県庁、市役所は全焼、各官庁の出先機関もほとんどが全滅し、」たと記されるほどの戦災だった（総務省ホームページにおける「政策＞一般戦災死没者の追悼＞国内各都市の戦災の状況＞岡山市における戦災の状況（岡山県）」を参照 https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/daijinkanbou/sensai/situation/state/chugoku_02.html 2024 年 9 月 1 日閲覧。なおこれらの記述は「『写真で見る岡山の戦災』参照」とのこと）。

甚大な被害をもたらした空襲をうけて、「病院の方は全焼したけれども、幸に職員並に入院者には怪我人はなかったこと、特に田中先生始め御家族も御邸宅も御無事であったことを知りましたときには、“まあよかった、よかった”と五百三十一の病友が異口同音に心から慶んだので御座います。」と在園者の代表として石本はみなの方の安堵をあらわした。その後も「御様子も承りたいので」、手紙の送受で田中の家族の近況も知り、「早速園内ラジオを以て一般に放送致しました時も、各病舎が安心と歓喜の声に満たされ“初孫さんをもうけ

られた先生はどんなにお歓びになってゐらっしゃるだらう”などとみんながお噂を致し、遥かにご祝福申上げたのでございました。」——高松と岡山であれば、いまなら JR のマリナーで 1 時間ていどの移動距離ではある。それが当時は、さらには療養所内にいる在園者にとっては、ずいぶんと「遥か」な隔たりだったのだ。

石本も三浦の「御寄附」について謝し、あわせて、同人の来島についても記した——「昭和十八年五月三十日に三浦様が御来園下さいました時には、御母堂様からの御慰問品としてお餅を沢山頂き、その御温情に対しお互が感涙に咽んだので御座いました。」。

両者からの寄附金は、「田中博士特別互助金並に三浦氏特別互助金の制度を設け、又田中博士記念果樹園並に三浦氏記念果樹園を開墾し、御芳情を永く記念感謝させて頂いてゐますが、時局柄両果樹園の一部を農園に切り替へ諸類や野菜を作って大いに助かってゐます。一例を甘藷にとってみますと、一個で七百五十匁、一株で二貫四百匁のものがございました。」との最近の収穫も報せる。甘藷 1 個 750 匁とは、かなり大きいのではないか。「本年〔1945 年〕六月十日には、田中博士記念果樹園にて穫れた馬鈴薯を田中先生よりの贈物として、一人当り三百匁宛を、又十一月十日の“御恵の日”には、三浦氏記念果樹園にできた甘藷を~~三百匁宛~~三浦様よりの贈り物として、之亦一人当り三百匁宛を配給致し、一同で感謝の念を新に致しました。」。

さきに記されていた 1943 年 5 月 30 日の三浦来島は、田中とその妻と娘 2 名、婦長といっしょだったという。すると、本第 16 巻冒頭の集合写真は、この来園時の撮影かとおもうも、娘ふたりが同行したという記述と写真に写る人数とがあわず、また、三浦とおぼしき人物もみあたらないので、これはべつな機会での撮影であり、そのつぎの単独の肖像写真の被写体が三浦なのだろう。

その訪問時には、「種々なるお催しによる心からの温い御慰問を受けましたこと、又故三宅さんの愛誦讃美歌五二九番を田中先生の御所望により唄ひましたことなど、本当に忘れられない思ひ出でございます。」——協和会の担い手として、またキリスト教霊交会の創始者のひとりとして三宅は、石本よりもひと世代うえの在園者だった。同人逝去にさいして、大島の療養所内では初の協和会葬が執行された。そのときに、三宅の「愛誦讃美歌」が歌われたという記録が、いまのところない。石本稿によると、529 番が三宅の「愛誦讃美歌」とのこと。

つづく、「その後、園内に於きまして戦争中、或は終戦による種々困難なる事情も興り

ました。」とは近況報告ということか——「また、先生方の御厚情を一入深く偕に感謝致し合ひし同労者であった東条政芳、村山九市の両氏が昨年亡くなり、今年になってからは北山謙三、上本隆重、大塚鑒、長田嘉吉氏達の旧友が亡くなったこと、又外に於ては三浦様の御母堂並に御令息様方が御逝去になったこと、或は国情が全く一変したことなど洵に感慨深いものがございます。」とは、物故者たちへの追悼であり、戦後なるものをめぐる実感だったのだろう。

田中文男について記そう。同人の出生地である兵庫県新温泉町のホームページにおける「添付資料>新温泉町ゆかりの先人（資料）」に同人の項目があった（https://www.town.shinonsen.hyogo.jp/page/?mode=detail&page_id=edc36f3851185a84bd559d2286160b13 2024 年 9 月 2 日閲覧）——「第 1 回文部省留学生として米国に留学した医学者／田中文男／明治 16 年（1883）～昭和 38 年（1963）」。「新温泉町浜坂^{〔マ マ〕}にまれ」（厳密にいうと、新温泉町は 2005 年に浜坂町と温泉町が合併して発足）、1908 年に「京都大学医学部を卒業」（厳密には、京都医科大学、ではないか）、1910 年に「岡山医専の教授に就任」、1922 年 4 月「同校の大学昇格に伴い岡山医科大学（現在の岡山大学医学部）の教授に就任」、1923 年「岡山医大付属病院院長」、1925 年「岡山医科大学学長となり、昭和 6〔1931〕年の 11 月まで学政面で敏腕をふるった。」、1934 年「岡山赤十字病院院長も兼任」、1940 年 3 月「医大教授を退き、名誉教授となった。同年、耳鼻咽喉科病院を開院」、1948 年「岡山県教育委員長に就任」、1961 年「岡山市名誉市民第 1 号に表彰された。」。

岡山大学医学部の構内には、「門人同窓生たちにより建立された故田中文男先生の胸像」があるとのこと（高原滋夫ほか「故田中文男岡山大学名誉教授の側頭骨病理組織所見」『日本美辞咽喉科学会会報』第 77 巻第 11 号、1974 年。同稿には「田中文男先生の胸像」とのキャプションがついた写真が掲載されている。なお同稿で田中は「鳥取県にてご出生」と記されている。）。

名世ありといわれるであろう人物とハンセン病をめぐる療養所を生きた人びととの交流である。

つづく、熊野梅香、松本音松、久我剛、笠居誠一、土谷勉の稿については、べつに論ずることとする（本シリーズ⑭'「第二次世界大戦後のハンセン病をめぐる療養所における自己省察」『彦根論叢』第 443 号、2025 年 3 月発行掲載予定）。

なお、久我の稿の末尾にはその余白に、おそらく土谷の手で、「作業状況（十二月三十一

日現在)」が記されている——「総人員 五一六名／普通室 二八四名／内訳、男二〇七、女七七／特定室 二三二名／内訳男一二八、女一〇四／作業希望者 一五五名／内訳男一〇六、女四九」。

§

土谷稿のつぎに、あらためて、「短歌作品 目次」がある。

感謝の言葉に代へて 岩瀬弘美（二四）／謝恩 小見山和夫（二五）／田中、三浦両先生に謝す歌 赤沢正美（二七）／懐しき真人 斉木操（二七）／元旦にうたふ、小見山和夫（二八）／田中、三浦特別互助金 〃（二九）／豚の貯金箱 〃（二九）／除夜の鐘 笠居誠一（三〇）／いもを焼き乍ら 浅山稔（三一）／切断十首 笠居誠一（三一）／乳いろの冬 小見山和夫（三二）／かはりなき温情 綾井譲（三四）／新任 斉木操（三四）／先生に捧ぐ 泉俊夫（三五）

——この目次をみると、普段の詠草ではなく、やはり「両先生」への感謝をうたった作品が多そうだ。

まず、岩瀬弘美「短歌」には、その冒頭に詞書がある（ページノズブルは、24[＝]欄外左上端、なし）——「田中農園・三浦農園・共に甘藷が大豊作で。私たちの食膳をゆたかにして戴きました。／感謝の言葉に代へて」。

食糧のすくなきはいはず特配の甘藷はすなはちなみだして食ぶ／甘藷^{いも}をやく炭火とろとろ冬の日^{ふゆ}に遠き御人へ思ひはせつつ／人群は車を籠をと配給の甘藷をもらふ小島のにぎはい／寒き宵はあついものよと妻と食ぶ甘藷^{いも}雑炊のまことうましも／汁へよし雑炊にもよし 甘藷^{いも}の幸炊ぐ人らの短日をはしやぐ／甘藷^{いも}を蒸す蒸気の白きはふきにつつ釜場にみてり児等のにぎはひ／明け暮れは食ふのみにかゝる幸福^{しあはせ}よ甘藷^{いも}の話題今日もにぎはに／貧しかるいとなみはあり妻がせし 甘藷^{いも}羊羹に茶をくませけり／甘藷^{いも}を食ふ顔顔顔が寒き日は囲炉裏にありてなごむたつきや／三浦農園一首／くろ土を抜き出て白し大根の育つ意慾は霜を葉にうく

ついで、小見山和夫「短歌／謝恩」で、これにも詞書がある（ページノズブルは、25[＝]欄外左上端）——「貧しき歌を田中文男、三浦幾治両大人に捧げ、せめて謝恩のしるしとします。」。

おほよその人に 私^{ひそ?} けき真心をかたいの上に常賜びにけり／はらからの縁にうとく住

み馴れてひとの誠の篤きに泣かゆ／島に病むひとりひとりの胸ふかく篤き心を通はせ給ふ／常ふかくそそがせ給ふみ目 ~~あ~~^{ありて} ~~ひそか~~^{「ひそか？」} 私 ならず生くべかりけり／園内ラジオ／世に遠き島に住みつく哀れさみしもしみじみ安しラジオ囲みて

——「常ふかく」と始まる 1 首は、田中と三浦の「両先生」のつねに深い眼差しがあるので、それを感じるか意識できるかにかかわらず、それがあるのだから、それによって眼差されるわたしたちは、ひっそりと、ひそかに、表立たずに、ではなく、しっかりと生きてゆけるのだ、と歌う。

つぎの赤沢正美は、「田中、三浦両先生に謝す歌」と題した（ページノンブルなし）。

限りなき情の露にうるほひて朝な冴ゆる水仙のいろ／かくばかり癩病む身にそゝがるる露に保たむ浄きいのちを／沁みじみと人の情を思ふ夜の心すなほに生きたかりけり／病窓／風に逐ふとびの視野を失せ淡き余光を保つ病窓／病窓を過ぎゆく風のたそがれて藤の若芽の寒々と見ゆ／熱いでしまゝに更けゆく月の夜のこの病窓に遠き瀬の音

——赤沢の 6 首は、「両先生に謝す」といいながらも、直截に謝意を詠む歌は前 3 首のみとみえるも、「病窓」をとおした光景と音響を見聞きできること、さらにそれを歌えることを謝す、と読んでほうがちすぎか。

つづく斉木操は、「懐^{ゆか}しき 真人^{まびと}」と題して 9 首を詠む（ページノンブルは、27[＝]欄外左上端-No.1＝欄外右上端、No.2[＝]欄外右上端）。

親炙^{しんせき}の其の日は挙げて 病人^{やまびと}がしこりほぐるる春の如くに 「田中先生御家族に」／郷土^{くに}の吉備の真人を語らひて県人会は楽しかりにし 「現在会は中絶」／世常人いみきらふ島^{もと}訪^{もと}なふが一家行楽の旅とのたまふ／かりそめに墮^おつる言辞^{ことば}悔ひにつつ拙なき歌を送るえにしや／はるばるにへだてはあれど常にがも 魂^{たま}ふれあへるゆかりたふとし／幼^{いはけ}なき児らが謝恩の寄せ書は「有難う」とのみ皆記るすなり／ × × × ／御老母がみ手づからなる福餅を涙に添へて 賜^{たま}びし想出 「三浦様御家族に」／み情けを永く遺すと汗あえつ拓きし地なり日当りのよき／あまりにも厚きみ 情^{こころ}謝さむとしかりそめに 墮^おつる言辞^{ことば}なりき

この斉木の稿の終わりにある余白にすべりこませるように、横書きで斉木は「(詩)」を記した。

みなし児／稚な童べが云つてゐた。／“美穂子ちゃん” 千穂子ちゃん”／三浦さんも知ってるよ！／——みんなあたいのお友達——／その稚な児に母問へば／お母ちゃんは去

んちつた・・・／“父ちゃん” あたい知らないわ！／——あたい“姉ちゃん” 一ち好き！／——^{うみつばくろ}海 燕 のねぐらには／今日も“お日様” 当ってる／親子揃って鳴いてゐた！！
ここで特別感謝号ならではの稿が、いったん終わるか。かわって、小見山和夫の「元旦にうたふ」（1946 年 1 月 1 日付。ページノンブルは、28^冊欄外左上端、なし）——

一、勅題 松上雪／松ケ枝に今朝積む雪の白雪の光りを見れば天つ地淨し／豊年の豊のしるしの白き雪松をたはめて今朝降りにけり／老松も若松も雪をかむりたり淨き田の面も穂に穂稔らむ／二、祝元旦／おぎろなき日の光りかも海阪の遠より昇る日の光りかも／新しき年明けにけり山川も平和の光りつつむかに見ゆ／温きみ心と沁みてかたじけな雑煮の餅を祝ひて賜びぬ／島安く年は祝ぎつつ戦に焼かれし人の上も偲ばむ／世の相きびしき中に年明けてなほ幸あれや生きざらむ身の／天つ地に年重ねつつかなしみのいよいよ熱し初日おろがむ／寒菊の一枝を活けて元旦の机を祝ふ貧しき中に

二題の歌につづくのだろう、「田中三浦特別互助金 小見山和夫」と原稿用紙冒頭に記したうえで 3 首（ページノンブルは、2629^冊欄外左上端、なし）——「貧しさを独り嘆きし日を思へばかたじけなさよ^{ぜに}錢 賜びにけり／うつしみの貧しきに賜ふ互助金もかりそめならぬ人のまことぞ／うつしみの貧しき吾等ちり一つむくひ参らせむ術なに悔し」、「豚の貯金箱」とあって 2 首——「小遣錢約めて賜べと世に広く豚の貯金箱をすすめ給ひつ／丸丸と太りし豚の貯金箱ま愛しきかもよ手触り重たき」、「田中三浦両記念果樹園」とあって 7 首——「太き人のみ名をこの島に記念すと睦み励みて山はひらきつ／四季かけてみいり豊けき果樹果菜いただく幸を人に告げこそ／この畑に穫れし甘藷の初物はまづ各各に配られにけり／さつまいも焼きて蒸かしてめでたさよきびしき冬を腹足らひつつ／図書雑誌月月賜ふみ心も嬉しかりけり島にし病めば／新しく生るる世のために御歳^{〔弥〕} 祢 すこやかに在ませ吾が^{うし}大人／騒然と移りゆく世にも島人の祈りは淨くあるべかりけり」。

笠居誠一は、「除夜の鐘」と題した 9 首を詠んだ（ページノンブルは、30^冊欄外左上端）——「敗戦の年去ぬ夜半や迷妄の夢ゆ醒めよと除夜の鐘鳴る／鐘の音は尽十方に響きけり新日本の春に魁けて／敗戦の年去ぬ夜ゆ鳴る鐘は無明の闇の扉を開きけり／肇国の昔に帰りした祈る聖明天子のことぶきをたた 一月元旦／み民われ年の始めにした祈る遠濤昇る光仰ぎて／道義地に落つを憂ふと^{みことのり地に伏してきく心新に} 詔書 ~~平したまへりわが甲子の君~~／国民と憂ひを共にたへむとふ御詔書は聞く涙新に／すさび行く現実の世にした祈る御詔書の意を思ひめぐりつつ／さし昇る朝日を仰き迎えけり新日本の初春をいま」。

大島に梵鐘があったか。あったとして、どの宗教施設のそれだったか。その音は笠居の耳に、回天の告知と響いた。めぐりくる「新日本の初春」への言祝ぎでもある。

その裏の浅山稔「作品」は作詠で、「十行廿字詰」（片面）「コクヨ 165」「規格 A4」の文字が印刷された原稿用紙に記されている（ページノンブルなし）——「甘藷を焼きながら／飢餓と言ふすでにたゞならぬ世に生きていもを焼きつゝ涙ぐましも／敗れ去りし世相のなかゆ病み呆けてわれらはかゝるみこゝろを知る／年暮るゝことなどもふと想ひ居りタまけて友と芋を焼きつゝ／この朝はラヂオ静かなり青空の避雷針の涯を雲流れつゝ／友と語り語り呆けたるみ冬陽やむなしさはかく堪へがたかりき／母病みし／はゝそはのはゝのほがらなる眸なりきまかなしく目を空に放ちぬ」。

笠居誠一はまた、「短歌 切断拾首」を詠む（ページノンブルは、31=欄外左上端、なし）——「足を断つ友を見守りつ我が足を断ちし昔を思ひめぐりぬ（川端氏左足切断）／足を断つか命を捨つる際にして足を断つとふ心きまれり／背柱に針射されたり足を断つ友の背柱に針さされたり／手術野の消毒なれり切断刀いましふれむと迫る手術野／手術野~~を~~見守る医師の眼澄みて切断刀は肉^しを切りけり／足を断つ鋸の音ききにけりわがした心神に祈りつゝ／医師言はず亦看護婦も黙深くつぎつきと手の働くたしかさ／医療機のかそかにふる音のして~~硝~~玻璃窓に冬の陽光暖とし／現身の足断つ友を見守りつゝ寒々と聞く松籟の音／四十五年歩み来し足たつ日なり玻璃窓に松の影むせふ昼／夕日光豊旗雲に輝きて暖とき冬の一日昏れ行く／旗雲の輝くみ空仰ぎつゝ祖国の榮神に祈れり／耕して麦急ぎ蒔く夕~~空~~^れ~~も~~黒~~く~~黒きまで群れ渡る鳥／空を飛ぶ鳥に^{〔ねぐら〕}「~~埒~~」の有るものを壕舎にこごゆ人の有るとか／枕する家無き人を思ふ日の夕空寒う北の風吹く／夕日いま沈む地平に一筋の雲は白う輝きにけり／夕拝の鐘は鳴りけりいと高き神に祈り鐘は鳴りけり／地に平和神に栄光あれと祈るイエス~~キ~~リストの鐘鳴りにけり／聖戦の名に踊りたる日を思ふ平和の君のみ生れ祝ぎつゝ」。

足を断つ友をみまもりながら、かつて自分が足を断った「昔」に「思ひめぐ」らしてゆくうちに、笠居は、肉体の痛覚、皮膚へのおそらくは冷たい感覚、医師の眼差し、音の有無、眼への陽の輝きを、肌への風の寒さを、そして風景も光景も想起し、またこころに感じとり、「祖国」に「聖戦」に「神」へと馳せる感興を詠んだ。

小見山和夫もまた、「短歌／乳いろの冬」の題での詠草（ページノンブルは、32=欄外左上端、なし、33=欄外左上端）——「わが視界再び暗く／おろそかに日頃ありつつうつそみ

の眼一つを更に暗くす／片眼のみ眼帯はずし暁の光明る窓に視力を凝らす／冬朝や白き眼帯を取替へて治療室を出づる片眼さぐりに／わが眼のみ暗き廊下を行交へる看護婦はみな白く動けり／寒菊の咲きそむといへば瞳よせ色見むとすべな庭の薄日に／行きずりに声かけられて戸惑へるいらへをせしが暫くをかし／わが視界日夜乳色の靄こめておぼおぼと淡し起居馴れつつ／窓の日にかざすレンズの定らず文字の表情を面白く見す／丹念に磨きしレンズ瞳にあてて便りは読^まむ午の陽のうち／なつかしき冬の朝かな湯を吞めば湯気やはらかくかほにかゝれり 啄木／白湯吹きてくもる眼鏡を掛けなほし朝一ときの心やすらぐ／その他／マツカーサー朝夕といはず口なじみやうやくすがし幾月すぎて／朝のラジオに英語会話の二つ三つ口なじみつつみ冬ふかみつ／勝つまでといのち病み堪へし年月の久しきを更に嘆んとすも／生きざらむ必定は嘆け聞あさるちまたの声の冬にきびしき／霜結ぶ暁の寒さを寝返りて盲ぼそりとつぶやきにけり／偶感／偏食に馴らされて久し鳥かごの小とりは出でて養るをしらず」——視力が弱まってゆくなかで小見山は、「わが視界日夜乳色の靄こめておぼおぼと淡し起居馴れつつ」と、淡い色を詠んだ。

綾井譲の詠歌は、特集の主題に沿う（ページノブルなし）——「変りなき温情にこたへて田中三浦両先生へ／美しきこのみ心を告げやらむ我が故郷に父母在さず／更にさらに歳を経につつ田中先生ふかき情を吾等にたまふ／銀髪はその温容のゆたかさをけふのみふみに思ひうかべつ（年末）／病む身はも 故郷^にの輩と遠く 住^ゐて人の情をしみにうけつ／三浦農園と称す畠に採れし甘藷の配給ありて／ふかし諸うまらに食してかたじけな思ひを遠人にはせつつ」。

「『習作短歌』 新任」は、斉木操の詠題（ページノブルは、34-No.1*欄外左上端、No.2*欄外左上端）——「朝ははや校舎に満てるしたしさやしみじみに云ひて見らと 初見^まえぬ／新しき世に倣ふべく教壇に復た帰り来ぬ若さ萌えつつ／勤めなる 縁^{えにし}はゆかし誰れ彼れと稚なかりにし見らもまだ居ぬ／磯馴れの松の直さにたとふとも癪見ながらの稚かさ 香ほへる／新しき世に研^きはむべく幼ならと俱に努とめむあなくしびなる／心琴にふれあふゆへの楽しさや見らに真向ひ憚らず云ふ／傷熱に臥やれる窓の小春日や遠足の見らはしやぎてゐむ／教師の 意志^{いし}即ち 容^いるる見ら故にしたしかるともあやまつべかり／傷熱のきざしに堪へて予習する午後の宿直^{とのも}は冷えとほりつつ／左手に吾れ字を記せば見らも亦試みてゐぬほほゑましかも（左中指切断）／明暗の直ちに見らに及ぼすをゆくりなく識る若さたもたな／ × × × ／いみちくもかそかながらにまともなる 言論^{ことば}の道^{みち}見展^さけ来むとす」。

斉木もまた、肉体の欠損に意を注ぐも、そこには「児」をめぐる「ほほゑ」みがある。その「児」らとむきあうとき、みずからの挙手投足が喜怒哀楽が相手に響くと知る。そうした日々をふまえてか、「^{ことば}言論の道」なるものをみつめようとする。

泉俊夫は「短歌」との題を記した（ページノンブルは、35=欄外左上端）——「多忙なる御日常などしのびつつ語り合ひつつ炉辺に楽しき／あたたかき御心こもる先生の便り楽しき今日も聞きつつ／しばしばに給ふ御文よ御心は常に吾等を思ひ給へる／雨近き夕は昏く港より気車の気笛のとどく親しさ／現し世の生活の様相に思ふ夜を冷々と過ぐ風音のあり／克難の過去にいやます現し世を生き抜く民に幸あらしめよ」——泉の詠歌は、「生き抜く」決意の宣言か、「生き抜く」ものへの憧憬の告白か。

S

ここにまた目次が入る——「遠山の雪唐松の黄葉かな／あとを追ふ子を置いて行く落葉径／（虚子）／作品（俳句）／大原枝風（三六）／多田勇（三七）／久我剛（三八）／香山爽子（三八）／笠居誠一（三九）／大田井春峰（三九）／久我剛（四〇）／辻長風（四一）／喜田正秋（四二）／辻長風（四一）／藤田薫水（四二）／上野青翠（ 〃 ）／藤田薫水（四三）」。

これもまた、特集の趣旨にそった詠句か。欄外左上端に 36 のページノンブルが記された面（2 ページめにはページノンブルなし）の冒頭に長文がある。

私達病者として最も餓ゆるものは何か、それは衣でも食でも住でもなく、これ等の点にをいては畏くも御皇室の恩恵下にある私達病者は一般社会以上に恵まれたることを感謝するものであります。／それでは何に餓えてゐるかと言はれるでせう。それは愛であると云へる、別ても家庭愛と云ふことが出来る。／入所以来拾数年、或は貳拾数年と隠栖生活を重ねれば重ねるだけ愛に餓えて来るものであります。／此の点田中、三浦両先生の御家族から受ける心からの家庭的御愛情は私達病者にとりて砂漠にてオアシスを得た様に心に湿ひを持つものであり、父母に接する様に思はれます。／これは失礼な言ひ振りを致しました。悪しからず御赦しを願ひます。／◎ 諸埋めて ^{【はたび】} 櫓火 をもとに返しけり／◎ 福々と焼諸腹に故郷の夢／◎ 諸焼いて母と距る淋しさに／◎ 水鳥やタベ淋しお窓眺／◎ 根深汁箸持つ前の祈りかな／◎ 櫓割りし豆手に結飯配らるゝ／◎ 振舞の結飯に冷えて日向ぼこ／◎ 破れ足袋まだ捨て難く綴り見る／◎ 年とともに著ぶくる見得の

潜みけり／◎ のしかゝる程に火鉢の火は絶ゆる／◎ 炉話をおさへて文を拝聴す／◎
御慕ひす御名に炉辺を離れけり／◎ 斧の柄に手唾湿して櫓と組む／以上私の生活断面
を拙き俳句に汲取り下されば甚だ幸ひと致します。／大原枝風記

——大原の「生活断面」にあらわれたいくつかをとりあげると、「櫓」は囲炉裏にくべる木の切れ端で、冬の季語、「根深汁」は葱を実とした味噌汁で、これも冬の季語。「諸焼いて母と距る淋しさに」の句は、そのまえにおかれた詞書と反響している。その 1 句は、母との隔たりを歌う、さきの詞書は、「愛に餓えて来る」とうったえる。療養所での衣食住については、「畏くも御皇室の恩恵下にある私達病者は一般社会以上に恵まれたることを感謝する」と、あふれんばかりに満ち足りてはいないだろうが、それでも報恩としての「感謝」を述べ、「私達病者として最も餓ゆるもの」は、「愛であると云へる、別ても家庭愛と云ふことが出来る。」との切望をあらわしているのである。大原の 13 句は、そのほとんどが、「焼諸」やそれにかかわる「炉辺」を詠み、その「諸」は「両先生」の「記念果樹園」の賜であり、それを施した「両先生」はまたその「御家族」をめぐる「家庭的御愛情」をとおして自分たちの「心に湿ひ」をもたらしているので、「父母に接する様に思はれ」る安らぎや慰めや憩いをうけている気持ちになるというのである。

これはつきつめると、「畏くも御皇室の恩恵」では「家庭的御愛情」は尽くされていないということだ。貞明皇后のいわゆる御歌「つれづれの友となりても慰めよ 行くことかたきわれにかはりて」（出典はたとえば、ハンセン病問題に関する検証会議編『ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書』日弁連法務研究財団、2005 年、の「第四 1953 年の「らい予防法」「第 4 藤楓協会および皇室の役割」「一 貞明皇后とハンセン病問題」）にさかのぼると、こうした「畏くも御皇室の恩恵」を象徴する言辞がすでにあったのだが、それは病者にせいぜい衣食住を施したにすぎないととらえられていたばあいがあるということだ。

「私達病者として最も餓ゆるものは何か、」と問われたら、それは「家庭愛」であり、その源は「畏くも御皇室」というよりも、ここ大島の療養所においては「両先生」にほかならなかったのである。

いとやんごとなき、「畏」き存在は、療養所には来ない、だがしかし、「両先生」は来る、その家族も来て、「家庭的御愛情」を自分たちにふれさせる。「両先生」のかかる来訪を「病者」たちは、「行くことかたきわれにかはりて」とはみてないのだろう。もっと言うと、実際に島に来て、しかも家族で来て「家庭的御愛情」をみせるひとが現にいるのだから、御

歌にいう「慰め」が虚妄となりかねないということだ。

「諸」が採れた、それを焼く、そのための櫓、それが燃える、その火を囲む囲炉裏端、そこに集う家族、そこには母がいた、そこが故郷——それは「夢」、「距」りのあるところ、それを想う「淋しさ」、それを埋める「両先生」とその「御家族」の「家庭的御情愛」。「諸」が導く想念が、「つれづれ」の御歌をかき消した一瞬だといえそうだ。

多田勇の「青松俳句」（ページノズブルは、37^冊欄外左上端）——「朝寒や男寡の鍋洗ふ／[✓]柿一つ取り残されて色ずきぬ／黄昏て紅葉の山をひたくだる／紅葉なる山に遊びて子等たのし／長病みの窓に二輪の帰り花／病良し小春日和の庭に佇つ／櫓刎る炉辺にぎやけく諸を焼く／子等寝せて話のつきぬ炉辺かな／著ぶくれて書を読む父のやつれ見ゆ」（第2句の[✓]は異筆。以下同）。

多田はとくだん「恩」も「情愛」もうたってはいない。けれども、「櫓」「炉辺」「諸を焼く」の語をとおして、さきの大原の情感と響きあっている。

久我剛の題目は「雑詠俳句」（ページノズブルなし）——「舟あげて庵治の港の羽根日和／風や浪に吞まる矢竹島／水仙の障子に海の蒼昏れぬ／初鶏や静かさ動く山明り／山脈の晴れ極りて寒波来ぬ／遣り羽子や籬の上の讃岐富士／庭もせの山茶花日和詩を吟ず／揚舟の居居つてゐる恵方道」。

「羽根」「初鶏」「遣り羽子」など、久我は新春を詠んだか。庵治、矢竹島と大島の周囲を詠んで讃岐富士、これは「標高 421.9m。丸亀市・坂出市にまたがる」「飯野山」（丸亀市ホームページ <https://www.city.marugame.lg.jp/page/3063.html>、2024 年 11 月 9 日閲覧）だとすると、大島からその山はみえたか。

香山爽子の「俳句」（ページノズブルは、38^冊欄外左上端）、まず「田中、三浦両先生の御肖像／慈み深きまなざし菊匂ふ／菊の香や尊く拝す御肖像／三浦果樹園の甘藷を戴し／立のぼる甘藷の湯気に祈りけり」を載せ、つぎに「雑詠／はたはたの向直りしが翔ちにけり／ペン描いて炉に座るより蕎麦湯かな／葱汁や薪の上に蓋を置き／葱汁の蓋のしづくを炉にこぼす／[✓]鍋蓋に生姜のせあり根深汁」を記す。葱汁にも根深汁にも甘藷は入れないか。

そのつぎの面（ページノズブルなし）は、林■（火偏に介）石の「俳句雑詠」ではあるが、原稿用紙にはおおきく×が記されている。その 15 句は——「北風に戸閉せる島の病舎かな／帰省者を見送る浜や北風^{きふ}の吹く／木枯や浪は荒びて濁る海／鳥渡る島の夜の空賑やかに／山茶花に名残の夕日及びけり／晩鐘に山茶花の花こぼれけり／ろ火かこむ顔ほくれ

けり甘藷燃ける／木枯や防空頭巾の人の行く／木枯や兵燹の街寒々と／闇売りの露店は寒う灯りけり／泊船に炊ぐ火明し千鳥鳴く／敗戦の年は暮れ行く寒さ哉／霜の声壕舎に寒う聞きにけり／雑炊に腹足りて寝る冬至かな／松の間に大根干す日や初霰あられ／十二月二十一日夜作」。

——「寒さ」のなか「敗戦の年」が「暮れ」てゆく、「防空頭巾」も「兵燹の街」も「木枯」とともに「寒々」とうたわれて、そして過ぎゆく。

そのつぎの面（ページノンブルも原稿用紙の罫目もない）に、笠居誠一の「俳句」——「北風に昼を閉せる病舎かな／灰燼の街寂々と北の吹く／敗戦の年は暮行く寒さかな／帰省者を見送る浜や北風の吹く／鳥渡る島の夜空を賑やかに／晩鐘に山茶花の花こぼれけり／ろ火かこむ顔ほぐれたり甘藷燃ける／泊船に炊く火あかし千鳥鳴く／解散の風は師走の街を吹く／闇売りの露店は寒う灯りけり」。

これはどういうことか？ 笠居と林の句がよく似ている。林は笠居の号だったか、あるいは、たんなる清書のまちがいか？

大田井春峰が詠句につけた題目は「雑詠」と「新年雑詠」（ページノンブルは、39=欄外左上端）——「終戦の悲しく年の暮れんとす／何に一つ買ふ物もなし年の暮／さびしさや煙草もきれて年の暮／みな買へば我も買ふなり年寒海鼠／新年雑詠／新らしき日本建設初詣／松風の音も静かに初明り／美しく波を動かし初日出づ／嫁が君二つ仲よく掃きだめに／二つ出て人を恐れず嫁が君」。

そのつぎの面（ページノンブルなし）には、久我剛「俳句」——「水仙の黄を吐く窓や海迫る／月寒し岬は波の屯せる／杖抱いて憩へる友や枇杷の花／島遠く潮満ちくらし夕時雨／通夜人に霜夜の寒さ極りぬ／陽を吸ひて山茶花朝の庭に燃ゆ／寒潮や日の当り来し小豆島／吹き暮れて町の灯遠き師走かな」。

辻長風は「新春」の詠題（ページノンブルは、40=欄外左上端）——「初荷積む汽車長々と駅を出る／駅前の米倉庫や注連飾／網小屋の並びし浜の初日かな／浜風に松の動きや風を揚ぐ／乗初めの船より見えし屋島かな／トラツクに店の名のあり初荷積む／復興の駅に門松立ちにけり／自転車に乗りて医師の年賀かな」。

——「駅」や「トラツク」をうたった句は、写生といえるのかどうか。想念の詠草か。

この辻の8句のあとに、「——○——」の記号が区分として記されて、ついで末尾に「勉」の署名がある短文——

◎ 新年運座会が久振りに開催された。この処、句友連の活気がほのかに窺へるやうで嬉しい。／この逞しい意気で二十一年度を、物の見事に乗切つてもらひたい。／作るには先づ観ること、読むこと。炬燵に尻から入れて大平楽をならべるばかりが能ではないのだから。頑張れ。 勉

「頑張れ」との後押しが述べられているが、「この逞しい意気」との観察どおり、青松同人たちはじつによく歌っている。

そのつぎの面は（ページノンブルなし）、それまでとは異なる原稿用紙（「No.」の印刷文字あり）に喜田正秋 7 句（題目なし）——「十葉や藪のなかなる蟹満寺／十葉を軒に吊して住寺かな／大人びし妹のしぐさや落葉焚く／病良し落葉の庭に佇ちもして／ラジオ聞く窓にはらゝぐ落葉かな／梅ヶ枝に箒あづけて落葉焚く／籬越へて落葉焚く輪に加はりぬ」。——「十葉」はどくだみ、ただし季語としては夏ではないか。「蟹満寺」は京都木津川のそれか？ なぜ「蟹満寺」なのか？

そのつぎには罫目のない紙（ページノンブルなし）に、辻長風の 9 句——「道端に積みし丸太や雪積る／初雪や岩を枕に丸木橋／校門に雪の積れり登校す／栈橋に船待つ人等息白し／メガホンを持てる駅員息白し／打ち上げし青藻の上の石叩／波音の今日も荒びぬ炉を開く／藁家根の傾きかかり氷柱垂る／揚舟に積れる雪を掃きにけり」。——やはり辻の詠句は、たんなる写生というよりも、見える-見えている眼前のようすと、かつて見た想念とを混ぜての句詠ではないか。

左上端にページノンブル 41 がついた面は、罫目もない白紙。

そのつぎの面の原稿用紙（ページノンブルなし）に、藤田薫水「青松俳句」——さぐり見る藪の太さよ藪の秋／灸すえてもらつて藪の粥すゝる／藪粥の腹をさすりて早寝かな／手さぐりに 南瓜^{かんぼや}洗ふ冬至かな／御歌碑の裏日だまりに日向ぼこ」。

藤田の句の末尾に、太い筆の線が引かれて、そのつぎに、おそらく土谷の手で短文がつく——「(田中先生昭和十二年御来島の砌の御挨拶の一節)／諸君が不自由なる身体、破れた肉体をもつて此の不便なる孤島に安住の境地を作られ、却つて一般社会の我々に対し、偉大なる感激を与へてをられる事に対し感謝の意を表したい。(中略)諸君は不幸なる病気に罹り、不自由なる身体をもち、肉親と離れ、社会を絶ち、現世には殆ど何らの希望も有する事の出来ないやうな境地に在り乍ら、日夜心の修養に努力して居られる事が、稍もすれば健康と権力によつて却つて墮落せんとしつゝある世人に大いなる反省と感化を与ふる、

／後略」。

そのつぎの面（ページノンブルなし）にもまた、太い筆の線で原稿用紙の一部を囲み、そのなかの枠目に、まえの面とほぼ同様の文面が記されている——

諸君は不幸な病気に罹り、不自由な身体をもち、肉親と離れ、社会と絶ち、現世には何らの希望を有することのないやうな境地に在りながら、日夜心の修養に努力してをられることは、稍もすれば健康と権力によつて却つて墮落せんとしつゝある世人に大なる反省と感化を与ふるものである（田中先生昭和十二年御来島の砌の御挨拶の一節）——後者のほうが、いくらか文言がやわらかいか。

つぎの面（ページノンブルなし、枠目なし）には、上野青翠「青松俳句」——「なすことの無くて病むみに冬こもり／霜に引く杖が六年の療住居／炬燵出ば島の松風波の音／炭ついでお通夜の人となりにけり／しづれるや屋島八栗の見えかくれ／有難や芋の御飯に大根汁／ふみ消て仕事にかかる椿火哉」。

そのつぎの面（ページノンブルなし）には、わずか 3 行の記述。これは判読がかなりむつかしく省略。

つぎの、左上端にページノンブル 42 がついた面は、白紙。

そのつぎの面（ページノンブルなし）に、藤田薫水「俳句」——「木枯や日は日もすがら夜もすがら／木枯や床になまこの薬食ひ／寝汗^{アセ}ぬぐふ夜の張戸打つ雪おこし／額に置くぬれ手ぬぐひや雪おこし／灯灯して鯉の血しぼる吊り蒲団／あり合せの物を茶ぐちに年忘れ／甘藷焼いて不幸な年の年忘れ／鐘鳴つて心忙しく年参り／ひげをそる老と語るも^{エン}櫟小春／テーブルに山茶花活けてクリスマス」。

§

つぎの面には、原稿用紙の欄外左上端に 43 のページノンブルがあり、浅野繁「子供の四季」が載る——「母父^{おもちち}の手許離れて病む児らの新しき年を寿がむとす／新しき年の始めに病む児らの^{いや}礼交す見ればよにも愛しき／配給のとぼしき^{もちひたう}餅食べつつ児らは思ふらしふるさとの家／今日こそと愉しむ児らが輪飾のかかりし^{かど}門をまた出でて見つ／ねもごろに児らが書きたる書初の「万福」とふは筆太にして／船の舵輪の額を掲げし室にして朝の目覚めを愉しむ児らよ／左義長もせず^{わらべ}童らのさぶしさよ窓をながる雪^{ぐも}雲のいろ／ふるさとの^{つゝみ}小包届きて^え笑む児らのそのかたへにてさぶしき児らよ」。

そのつぎの面（ページノブルなし、44=欄外左上端・3=欄外右上端、4=欄外右上端、45=欄外左上端・5=欄外右上端、6=欄外右上端、46=欄外左上端・7=欄外右上端、8=欄外右上端、47=欄外左上端・9=欄外右上端、10=欄外右上端、48=欄外左上端。以下の引用において、原文のページがかわるところで改行した）は、「子供」たちの作品か。

母から僕にきた手紙（大西哲二 高二）／母のにはひがするやうだ／故郷の母アさん思ひ出す／ほんとにほんとに懐かしい。／男^き童^{わらべ}のなやらひの夜のにぎやさよ 女^め童^{わらべ}の^{へや}室はひつそりとして（節分）／白桃の花活け添へて女童^{ひひな}の立居ひそかに雛^{ひな}祭りぬ（桃の節句）／はや炬燵塞ぎて児らは板縁の日当りにしてこゑ交しつつ／春の遠足／童^{わらべ}らの桃咲く径を^{ゆき}往^き来して呼び交すなり遠足の今日は／つくつくし蕨摘みある女童^{わらべ}の赤きスエータに蕩お陽差しや／（赤松清子 高二）／やさしい好きなお母アさん／そつと写真を出して見た／すると母アさん頬笑みながら

私に何か云ひたげに／じつと私を見つめてた。／送^{わらべ}り来し草餅の香にこの童^{わらべ}^{おもち}^{おもち}^{おもち}^{おもち}にけりその母^{おもち}父^{おもち}を／（庫元和恵 高一）／潮干狩夢中になれば日が暮れる／（岡崎安彦 高二）／潮干狩虫の穴をも掘つてみる／童^{わらべ}らの甘茶の甘さ云ふ聴けバ久しかりけり糖分のこと／（岡崎安彦 高二）／◎ たんぽゝたんぽゝ春風に／綿毛がとぶよたんぽゝよ／◎ 綿毛がお耳に入つたら……／お耳が聴こえぬやうになる。／子供ハお耳を押へたよ。／（三戸忠 初六）／ある晩に竹でつついた雀の巣／島棲みのわびしさ云はず風張りてあぐる童^{わらべ}の

日もすがらなる。／（赤松清子 高二）／私の好きな兎さん／どうしてもものをいはいないの……／私がそつとのぞいたら／赤い眼をしてはねてゐた。／干魚下からにらむ子猫かな（岡崎安彦 高二）／山里やたかく鼻つく藤の花（ 〃 ）／青空に尾をふり泳ぐ鯉幟（畠山一義 初六）／男^き童^{わらべ}はラジオかたみにかいよせていちづなりけり夏場所実況／ほやほやとお膳に分けた桜餅（三戸忠 初六）／柏餅うむせるまでのたのしみさ（畠山一義 初六）／樟若葉もりあがる空に眼をや^{わらべ}りて童^{わらべ}らははや水泳をいふ

子供達祭を待ちて日が永い（赤松清子 高二）／海風やある一院の松落葉（戸田次郎 高二）／（赤松清子 高二）／私の好きなバラの花／あまいにほひのバラの花／私の好きな色どりで／うれしそうに咲いてゐる。／草笛を吹いて別れし妹と（山上広光 高二）／花南瓜起きればもう花が咲いてゐた（庫元久子 初三）／朝起や南瓜の花もいせよく（畠山一義 初六）／かたつむり家のかついで何処へ行く（須内キヨカ 初四）／童^{わらべ}らは^す素^{あし}跣

となりてねむごろに甘藷挿すなり雨の晴れ間を／（山上広光 高二）／かぼちやの花の咲く頃ハ／母アさん面会来てくれる／おみやげどつさりもつて来る。

島ハはや蚊帳吊りにけり子供らの~~き~~^ようやくにして眠りけらしも／朝なさな子らが手入れの馬鈴薯の花ようやくに咲くべくなりぬ／もりあがる青葉の空に／南風^{はな}が吹く 南風^{はな}が吹く／少年の夢想ハ翔る。／あの山の向ふにハ希望の大洋がある／おいらハ船長だ……／水平線を見つめて／南へ南へ船を走らす。／阿呆鳥が飛ぶ……／鱸がよつて来る……／愉快だ愉快だ／少年ハ壁の舵輪の額を眺めてゐる。／童らは涼みに出てて檐先の風鈴にいまかよふ

風あり／石も木も真夏の光る暑さかな（松本常二 高二）／女童の胡瓜をきざむ音きけバしばしば途切るその調子かな／（松本常二 高二）／田からかへつて 鹽^{たらひ}の水で／父さんも裸ばくも裸んば／サボテンの棘にことなる白き花（岡崎安彦 高二）／夏の昼畠のトマト光るなり（畠山一義 初六）／八月十五日／玉音を聴きアリたるしばらくハこゑはばかりて子らの動かず／病めるともこころひたぶるこの子らや国の帰趨ハ信じたりしを／遂ひにかも国 敗^{やぶ}れたる現実をうべなはんとすうつしけもなく

盂蘭盆を愉しみてゐしこの子らのゆく末ながく苦しかりけむ／秋晴れや日の丸の旗ひるがえる（中井八千代 初五）／田舎道咲きほこりたる秋桜（山上広光 高二）／童らはみない寝にけるらしようやくに月まどかなる空となりにけり／（庫元久子 初三）／晩になりましたから／兎さんお月様のところへ／お餅つきに行きませうと／兎二匹がそろつて出かけました。／遠足のかへりにちらす彼岸花（中井八千代 初五）／岩のかげ釣竿の先はねあがる（赤松清子 高二）／秋出水一夜明ければかはりはつ（庫元和恵 高一）／秋の暮音もそここの虫のこゑ（松本常二 高二）／茸狩りの籠の中なる落葉かな（赤松清子）／あぜ道をゆくかたわらの黄菊かな（戸田次郎 高二）

堀り起す土のにはひとまろび出て甘藷の肌のくれなゐのいろ／土の香のしたしき 甘藷^{いも}を頂けりさて如何にして 食^とべむものか／むしいもやあついあついと手から手へ（畠山一義 初六）／青き空島の祭も近づきて（岡崎安彦 高二）／参道の角提灯に火の入りてなにか華ぐ秋の祭は／椎の実を拾ひながらも足すべる（中井八千代 初五）／張り替へてすぐ穴のあく障子かな（岡崎安彦 高二）／流れ来し 雛^{ひな}なりけり 女 童^{め わらべ}は一ト日を飽かず秋日の縁に／秋の遠足／果樹ははや葉を落ち尽す見晴らしにつんつんとして青き葱の秀窓に見るガラスの曇り夜寒かな（田中徳吉 初五）／空に見る火の玉の飛ぶ夜寒かな（大

西哲二 高二)／秋はやも終りなりけり果樹園に 童^{わらべ}らと来てやすらがむとす／童らが 厨^{くりや}のつとめする見れバ甘藷^{いも} 雑炊を焚きにつつあり／長田先生昇天さる／国いまだ塗炭の民を救ひ得ぬ混乱の中に師ハ逝きませり／松籟のどよもす夜さをやすらかに昇天し給ふ惜みてやまず／おしみなく愛を分ちし師をしたひ子らハ日増しにさぶしがりつつ／素跣にて干潟を走りゆきし子のなまこ^{なまこ}ひとつを拾ひ来にけり／岩の上にかいかがまりて牡蠣叩く子らのそびらにたたみ来る波

音立てて燃ゆる焚火をうちかこむ 童^こらの 両頬^{もろほ}は林檎のごとし／栄養のとぼしくなりしけ寒さか 童^こらハかたみに著ぶくれにけり／クリスマス／日を経つついよようのりし愉しさのいまは虚しきクリスマスかな／教会の灯の明るさよしみじみと何かうつろなるクリスマスかな／教会の坂下りくる 童^{わらべ}らのそびらの翳の寒々として／餓え死ぬる人ありけらし師走風ひそかに餅ハ搗くべかりけり／ひそかにも年迎へむと注連飾る 童^こらが 門^{かど}べに釘打つ音す／かい寄りて年を守る夜のひもじさにくすめる子らを見つつ堪へむか／十二月二十五日記

——これまでも本誌に寄稿していた子どもたちの名がならぶそのなかに、ふたり、面識のある在園者がいた。そのうちのひとりについては、すでに書いた（本シリーズ④「手づくりで悼む」2016 年 4 月、参照）。もうひとり、本誌に寄稿しうる年代のひととはわからなかった。

子どもらの作品を記したとおもわれるページが終わると、原稿用紙の罫目全体を筆による太い線で囲んだ枠内に、土谷勉の手による記述がある（ページノズルなし）。

現在、少年室 十人／少女室 五人／です。以前にはもつと多人数でしたが、全体の病友の減少とともに、こゝもその影響をうけずにゐませんでした。／毎日学校に行きます。外の学校と変りはありません。学校の先生は只今三名です。二学級宛受持つてをられます。／戦時、戦後を通じ、奉仕作業に度々願ひしました。しかし、皆は一度だつて、いやな顔をしたことはありません。ニコニコしてよろこんでやつて呉れます。／児童作品を編輯して、「若葉」といふ回覧誌が学校の先生の努力で出てをります。図画も書方もとても上手ですよ。田中先生、三浦様にも一度見ていたゞきたいものですね。／こんどは歴史、地理、修身が学科目からなくなりますとか。此方の学校も教授方法に苦心してをります。でも先生方の努力で、とも角、立派な教授が出来てをります。どんな困難が

あらうと、頑張るでせう。児等は二十一年度の輝しい元旦をはり切つてをります。

——これは、土谷による少年室、少女室、園内学校についての近況報告だった。『閉ざされた島の昭和史—国立療養所大島青松園入園者自治会五十年史』（1981 年）によって、『若葉』という書名の逐次刊行物があつたと知られていた（同書所収「文芸活動の歷程」の章の見出し「敗戦後の転回」において「『若葉』『わかば月報』＝養護学級生の画文誌」との記載）。ただしその所在がわからなかった。土谷稿が伝えるところでは、それは「回覧誌」だというのだから、当時の『青松』とおなじ手書き手づくりだったのだろうか。『青松』は残ったが、『若葉』は残らなかったか。

つぎからの原稿用紙 4 枚は、子どもから「両先生」に宛てられた手紙である。下書きなのか写しなのか。田中先生宛て赤松清子（49＝欄外左上端）、田中先生宛て山上広光（ページノブルなし）、三浦先生宛て中井八千代（50＝欄外左上端）、三浦先生宛て岡崎安彦（ページノブルなし）。

みな正月を楽しみにし、「両先生」に感謝を述べつつ、時局にふれる——「終戦後の初めてのお正月です。」（赤松）、「今日は敗戦の悲しみの底に沈み、食糧、其の他物資欠乏の苦しみに喘いでをります。」（山上）、「戦争もとうとうすみしました、新聞やラジオでも罹災者が橋の下や道ばたで寝てゐるといつてゐます。それを聞くと私達は布団の中で気持ちよく寝てゐるのに、その人達が可哀想でたまりません。先生にはお怪我はありませんでしたか。六月三日の晩には高松へ空襲に來ました、その時は恐しくて、急いで防空壕にはいりました。こちらは横穴の防空壕です。それも今では不用になりました。」（中井）、「僕達も元気でたのしく日を送つてをります、しかし、いま、日本は食糧其の他の物資欠乏の苦しみにあえいで居ます。」（岡崎）。

長田の逝去を惜しむ児童もいる——「十二月十八日は長田先生がお亡くなりになりました、私達は淋しくてなりません。」（中井）、「かかる〔物資欠乏にあえぐ〕中に、三浦先生始め田中先生、園長様の親心の温い御恵のもとにたのしく日を暮しお正月をむかへる事が出来るのは感謝にたへません、この中一つ悲しい事は、長田先生の天国に召された事です。けれども天国で僕達の身の上を守つて下さいますことを信じてうたがひません」（岡崎）。

山上の手紙末尾に見える「最後に先生御一家の御健康と御幸福を、この小さい緑の島より祈つております。」に、自己認識の一斑（「この小さい緑の島」）をうかがい、赤松の「美穂子お姉様に四六四九お伝へ下さいませ」に見える表記法に驚く（下線は引用者による）。

S

「青松第十五号短歌合評」(51=欄外左上端、2=欄外中央下端、52=欄外左上端・3=欄外中央下端、ページノズブルなし、53=欄外左上端)——まずは、綾井譲「この島に死にたしと云ふ人ありて我が意の如く嬉しかりけり」への評は、「赤沢評、自己の現実を明瞭に意識する事は其の現実が悲惨であればある程困難なことである。癒ゆるなき病気であると思ひ乍、此の島で果てるのは他人であるかの如き錯覚に捉はれるのは弱き性情の持主ばかりであらうか——此のやうな意味で一寸弱々しく感じられるが激しいものに立脚してゐるので好感が持てる歌だ。／笠居評、淡々とした詠みぶりであるが意あつて舌足らずのうらみがある、四五句「我が意の如く嬉しかりけり」は動かす事の出来ないと思ふがもう少し何とかならないか。嬉しいから嬉しいと言ふたのでは詩情にとぼしい。然し表現に今一考すれば良い歌になる」。

ついで、泉俊夫「暮色ともなれば親しも眼に映ゆるなべての彩のやはらかにして」に、「赤沢評、ひと日の活動は終つた。自然は今、眠りに付かんとしてゐる。其のやはらかい抱擁力にいだかれてゐる作者も又幸福である。初句と二句に「も」が重なつてゐるのはどうであらうか——「むしろ暮色は親しかりけり」としては如何／笠居評、作者は近頃目を患らつて居られるらしい。歌の意味は理解する事が出来るが。文字の使ひ方に無理はなきか。初句「暮色」がそれである、三句の「眼に映ゆる」は映つるとあるべきである。四句「彩」をいろと読まして居る、歌は「うた」であるから耳で聞く文学である。~~目で見~~からあまり文字にとらはれすぎると。かへつて歌の生命を弱くする事がある、「暮色」は「日暮」とか「夕暮」とすべきである、然し「夕暮」とすれば如何ですか、平凡になつて作者の意にそはないかしら。「暮色」は難点である、一考を乞ふ。

つぎも綾井の1首か——「よき秋をただに坐りて畳移る日光恋しむ盲む眼に」に、「泉評、作者の気持は良く分るが、何んとなくゴテゴテしてゐて詠みにくい歌だ、三句以下押し付けがましく、説明的になつてゐる故かも知れない／笠居評、「健やかなる者は医者を要せず、只病ある者のみこれを要す」お互に弱くなると日向ぼこをして暖を取る。作者も弱くなつて。玻璃窓越しに移る日光を恋しむ姿が見えるが作者の眼は盲む程悪化して居るのか。専心御養生されん事を乞ふ／浅野評、やがて盲てゆくであらう眼に畳を移る日光を見詰めてゐる作者のせつない気持が滲み出てゐる。明暗の深い作品。唯言葉から来るものと、こゑ

をあげて読んだ時に起る感じにまだ充分でないものがある。二句「ただ」、三句「たたみ」、四句「しむ」、五句「しひむ」等、語韻をととなつてゐるのが、それほど効果をあげてゐない／四句あたりに休止があつてもよいと思ふ。例へば「日光は恋ほし」とか「日光恋ほしも」といふ風に――。三句「畳移る」の語感も一寸気になる。とまれ盲てゆく作者の寂しさが心を打つ。盲評多謝」。

つぎに笠居誠一の1首――「働らける事に誠の生き甲斐を想ふ現実の朝夕楽しも」には、「泉評、働らけると云ふ事の楽しさを沁々味はつてゐる、作者の感情が良く出てゐて非常に気持のよい歌だ。ただ四句目の想ふが気になる、是れは思ふの方が良いのではなからうか／浅野評、元気で働けると言ふことは誠に楽しく愉快である。しかも、病者でありながら働けるといふ。感懐は尚更であらう。さうした「働き」又は「働ける」現実には真摯な楽しみを見出した作者がほほえましく描かれている。とかく暗くすさみがちなわれわれの生活を。仕事を拒否し易い現在の人心を「働く生き甲斐」に着眼し表現し得たことは老巧な作者によつてはじめて成功したのだと思ふ。唯言葉が堅いといふ感じは作者の性格であらうが、もう少し言葉そのものに艶が欲しい。とまれ作者の姿が髣髴される」。

そして浅野繁の1首――「朝まだき鹹焚きそめし焰明りを黒く汚れし犬が横切りぬ」に、「綾井評、焰明りを黒く汚れし犬が横ぎつたと言ふのであるが先づ月並と思ふ、朝まだき其の焰明りに来た瞬間しゅんかんの犬に作者は興味を持ちものしたと察しられるが。これでは詩情にとぼしく「焰明りと」汚れには相当な間隔がありはしないか、作者に一考を求む／小見山評、一つの時局風景とも言ふべきか。療養所にして、この風景あり、切実なるものあり。浅野君は常によき境地をつかむ。感受性の良さを思はせる。而してこの歌は佳作とは言へず。印象がうすい。~~常識から云へばかまどの前~~それはこの犬がよぎつた所、つまり焰明りの位置である。常識から云へばかまどの前であるべきだが。この場合それが肯定し難いものを感じさす。悪く言へば。犬を持つて来た所に作意が目立つ様なり。印象的であるべきが。かへつて反対の結果となりたるはその為ならむか／笠居評、綾井、小見山二君の批評でよいと思ふが。作者が目立つと言ふ。難はまぬかれまい。朝未明の焰明りを黒くよごれし犬と言ふて居るが黒く汚れしとまで言ふ所は云ひすぎの感じがある」。

さらに赤沢正美の1首――「敗れては云ふ事こともなきみ軍の術なき瞳に星冴ゆるらむ」に、「綾井評、想像から生れたものだけに迫力がない。併しかつて知らない敗戦の悲惨と言はふか。悔ひとも嘆きとも表現にならぬ複雑な感情を殺して、祖国を遠く思ひつゝ復員の

日を待つ兵の瞳に果して星が冴えたであらうか？ おしろその光りもうるみ泪となるべきではないか。今一步つきつめて欲しい／小見山評、全くいい境地である。敗戦のしみしみと身に沁みるものがある。但し一二句のすばらしさに比して、四五句やや物足りなさを感じる。また「み軍」といふ語は四五句に対してどうか？ 複数にすべきか。単数にすべきか、研究したい／笠居評、この歌は読者の感じ方で現兵の軍人と思ふが、~~この~~歌作者は敗戦と言ふ事に重点を置いて居ると思ふ。そこで問題になるのは「み軍」である。この「み軍」は一考すべきである」。

青松同人たちはじつによく評している。詠者の心身のようなすを気遣いながら、詠み手のこれまでの作をふまえたうえで、示された歌をあますところなく評し、讃える。この誌面がじつによくそうした協同の場として活かされている。それは、つぎの句評もまたおなじ。

「小見山評」の末尾余白に、筆による太い線で囲まれた箇所に、「青松第十五巻俳句合評／多田、青翠、枝風／薫水、爽子、久我／の諸氏／次頁へ」との記述。

その「次頁」から始まる句評は（1＝欄外右上端、54＝欄外左上端、2＝欄外右上端、3＝欄外右上端、55＝欄外左上端、4＝欄外右上端、ページノズルなし）、多田の句「◎ 露しとゞ行く畦道の狭さかな」に、「久我評／多田君の畦道の句は平凡と言はゞ平凡であり、又説明的でもある、技巧としてもあまり上々とは云へないが情景も朝の散歩らしく其の表現も面白いと思つた／爽子評／「行く」「かな」等あまり意味をなしてゐない。殊に此の句の場合かな止めは空間埋めにつけて付けた様である。世界最短詩なる俳句に於てかゝる損耗は第一に心すべきであるものと句を練ることである。／薫水評／露が降つてゐたため狭い畦道が一會狭く感じたのであらう。これでは云ふてしまつた感がある。少し余韻がほしい。／青翠評／作者は露の深い朝、田を見廻はつた時があるひは朝の散歩に田舎道を通つた時の感じてせう、田の畔からは枝豆の葉が露で道にひろがりてぬれてそのため歩く足もとは下駄も何もかもぬれて狭い畦道が一そう狭められた感じてせう。稲の葉先も露の玉を持つて朝の太陽に五色に輝いてゐる。すがすがしい句である。而しそれだけで平凡な句だと思ひます／枝風評／平凡であると云ふのみです。」。

つぎに喜田の句「◎ はたはたに病める瞳を凝らしけり」に、まずはだれの評だろうか、「喜田君の句は相当詠み慣れてゐる。病床の憂鬱な心理を卒直に描写して成功してゐるあたりよく研究されてゐる。そして細かい感覚がこの句を生かしてゐるのではなからうか」があり、ついで「爽子評／一応まとまつてはゐるが格別ピンとくるところがないため再読

三読して食ひ足りなさを感じずるが指摘出来る決点も見出せない。之平凡なり。はたはたの一挙一動を凝視してゐる。から焦点はおのづとはたはたに移つて行くであらふ。はたはたを客観視すれば直実の俳句が容易に生れるであらう。俳句はこれからと云ふところ。／薫水評／病窓近く飛んで来たはたはたにどの様な思ひを持つてゐたか吾々には想像の付かない。潔いものを思はされる。長らく入院してゐる作者の氣持を察する時には同情に堪えない。一日も早く退院を祈る／青翠評／よく田舎の子供がはたはたをつかまへて自然の中に遊んで居る風景を見かけたものです。此の句のはたはたは大人がしかも目での患つた病人が氣分のよい時にじつとして居る。はたはたを見すゑてゐる情景でせう。こうした小さいはたはたにも細心の注意が払はれるのも風流人です。唯難を云へばはたはたを見た場処がはつきりしないのでないでせうか。而し秋と云ふ感じはよく出て居る／多田評／病床に空しく日々を過ごしてゐる時作者のすぐ近くの所にはたはたが飛んできた。そのはたはたを作者は何時までも眺めながら色々空想にふけてゐると云ふ所がよく出てゐると思ふ。／枝風評／氏の句の些細なる觀察眼に敬服するものである。句  ^[意か] は唯はたはたに瞳を向けてその動き興をひるただけのことであるが、それは健康でぴんぴんしてゐる者には何だかはたはたが何んで珍らしかと云はれるであらうが入院者として病める寝台に束縛された如く終日を活らしてゐる者にははたはたの動き一つにも慰さめられ興を持つものである。病める瞳と云ふ語により此の句の佳さが出た。

剛の句「◎ 句ひ来る潮の光やごばれ萩」に、「爽子評／拾七字の中にあまり何もかもと欲張つてゐるためにまとまりがない。ばらばらである。中七座五はそのまゝ置くとして上五は充分推敲の余地があると思ふ、一考を乞ふ／薫水評／第一句は氣障りである。「日に光る潮の句ひや」でどうですか。／青翠評／句ひ来ると言つて切つてこれはこの句は海と島山との間隔が非常に接近してゐる、又潮の光やで光が句てもはなれて居る様思つて主観的であり、又客観的でもある、而して潮の光が句ひ来たか何うか人々によつて感ずる差がひらく句である。光線で句ひは動的であり。ごばれ萩は静的植物であり。これを結び付ける事は仲々難かしい事でないでせうか。僕がもし此の句を作るとせば、潮光りさす島山にごばれ萩、としますが。しかし此の句は込入つた仲々よい句です。／多田評／「句ひ来る潮の光やごばれ萩」この句を第三者が見て果してその作者の氣持がぴんと頭に浮んで来るでせうか。中七「潮の光や」はどんな所を云つたものか、私には判全としません。」。

誠一（笠居）の「歳末弁（無村全集）」は、「無村の短文であるが現実の社会情体と相照

し見て教へられる所多々有るを思ふ、文は命で有り、人格の表現である」と結ばれる文章と、そのまえに蕪村の引用からなる稿である（ページノンブルは、56^冊欄外左上端）。転載された蕪村の文章をとりあげよう。

名刹の街にはしり貪欲の海におほれて、かぎりある身をくるしむ。わきてくれゆくとしの夜のありさまなどは。いふへくもあらずいとうたてきに、人の門をたたきありきて、ことごとしくののしり、あしをそらにしてののしりもてゆくなと、あさましきわさなれ。さとおろかなる身は、いかにして塵区をのかれん。としのくれ笠着てわらじはきながら、片隈によりてこの句を沈吟し侍れば、心もすみわたりて、かゝる身にしあらはといと尊く、我ための摩訶止観ともいふへし。／蕉翁去て蕉翁なし、とし又去や又来るや／
蕪芭蕉去てそののちいまた年くれす 無村

§

つぎに、原稿用紙を波線で囲んだそのなかに、「同人各位」に宛てられた「速報」（二重丸の傍点あり）が記される（12月23日付。ページノンブルは、57^冊欄外左上端）。

今回「青松」原稿投稿者を同人制にすることに決定しました。これハ林先生やその他の方乃至協和会にて文芸に関する雑誌及び書籍を頂き、購入した場合、どの範囲に廻覧してよいか迷ふことがたびたびですし座談会や研究会をもつ場合、その人選に難渋するのであります。その為に昭和二十一年一月号の原稿投稿者を基本として同人を決定致す考へであります。この同人は投稿者全部でありますから諸兄姉の御承解を求めると同時に奮起して「青松」の原稿を投稿されるやう切望致します。

——「廻覧」の「範囲」は、会を催すさいの「人選」に「迷」ったり「難渋」したりするので、「同人制」にするという、これは、「投稿者」を増やすことを図っての変更なのか、それを狭めようと狙ったうえでの処置なのか。

ついでその「内規」が示される（さきの「速報」とは手が異なる。引用にさいして漢字カタ仮名文を、漢字ひら仮名文にあらためた）。

一、本会は大島の新文化建設を最大の目的とす／一、本会は機関誌、青松を適切に発刊す／一、本会は、機関紙、青松、に投稿せしものひとしく同人と認め、文芸その他の原稿を投稿すること／一、本会は自由に入会乃至退会するを得／一、本会は一回以上続けて投稿を怠りし者は退会せしものと認め本会より除名す／但、病氣事故はこの限りにあ

らず、尚他の事情にてやむなく休稿せし場合は当事者にその由を伝ふること／一、本会の原稿は期日迄に必ず所定の当事者へ投稿することを厳守し、もし遅稿なりし場合は当事者の許可を求むること／一、右は昭和二十一年青松一月号、即ち第十七巻より是を実施す／以上／昭和二十年十二月二十三日

——「適切に発刊」「自由に入会乃至退会」をうたい、「怠り」を排除するとの方針からは、さきのわたしの疑問の解に検討をつけることがむづかしい。つぎの第17巻は、どういう誌面構成となるのか。

「あとがき」（ページノズルは、58^冊欄外左上端、なし）は、その末尾に「勉」の署名あり（1月9日付）。

月日の経つのは本当に早いものでもう又一つ歳を重ねた。本号は「田中、三浦両先生に捧ぐ」特別号とし、新春を期してお手許に届けることの出来ることは、実にうれしいお正月である。清記は御手数でも浅野さんにして貰ふ。／田中先生、三浦様、少しでも御安心がいたゞけるよすがともなるかしら——。先生の御手許に届ける清記した別冊には、田中、三浦特別互助受領者のお礼の言葉を一緒に綴ることにした。写しを本巻にもと思つたが、差障りもあるので、お送りする分だけにした。悪からず。／田中先生のことだ、三浦様のことだと言へば誰彼なしに書いて呉れることか、編者にとつて一番うれしかつた。本巻が少しでも充実したものになつてゐるなら、それは皆、両先生の人格に帰せらるべきである。ほんとに有難い、うれしいことである。／◎ 昭和二十一年を迎へ「青松」もやゝ一人歩きし得る程度の成育ではあるまいかと、意を安じてゐる。短歌に俳句に、戦時中とちがつた活気が見られるやうだ。安心は少々早いかも知れぬか。心配はしたものであるまい。今後とももう一ふん張り利かしてもらひたいものである。／◎ 執筆上、編輯上「青松」の政治性といふ問題が、今頃取上げられ、この処、浅野対今井といふ形になつてゐる。たのしい面白いことである。知らぬ人があるかも知れぬが、一応皆も自分のことにして考へてみるよう奨めたい。／この問題は昔から考へられることだし、誰にも一応の考へはあらうことだからね。／十六巻、十七巻を結局、特別号にして、新年号ともいふべきものを、十八巻として、今月、浅野さんに編輯してもらふことにした。特別が二巻もつづくので、皆急しいだらうか、然し、書き甲斐のあつたことだらう。情熱でやるのだね。民主々義は責任協同主義のことなんだから、皆が責任を持つて、「青松」を育上げるといふことは、大いなる民主々義である。／昭和二十一年度も彼此重畳が予

想されてるが、結局根限り力限り励むより他はない。その上でどうともなれてある。一生懸命やつて、やり終せなければ仕方がないではないか、ニツコリ笑って往生せうではないか。／白状するが、私は、十六巻と、十七巻の編輯に今迄を通して一番気のりがした。皆もさうだろうと思ふが。／一月九日 勉

——この巻もまた、追悼号の先例にもあった、「清記した別冊」を「感謝」のかたちとして「先生」に届けるとのこと。また、淡泊な書きぶりながら、1946 年 1 月号は本第 16 巻もふくめて、第 17 巻、第 18 巻と三巻におよぶという。第 17 巻が「特別号」、第 18 巻が「新年号」。「皆急しいだらうか、然し、書き甲斐のあつたことだらう。」とは、すでに執筆も編集も終わっていたか。そうした慌ただしさや忙しさをこえたところに、「責任協同主義」の発現があり、それすなわち「民主々義」だと、時世とみずからどもの成果とをつなげてとらえてみせた。土谷がいう「十六巻と、十七巻の編輯に今迄を通して一番気のりがした。」とは、第 16 巻所収の「田中先生／三浦様」との宛てどころから書き始められた土谷稿への渾身にあらわれていようし、また、長田穂波を悼む第 17 巻にも土谷は心身を揮って病友や同人とともに、それをつくりあげたことだろう。

1945 年から翌年への年越えに、大島青松園では健筆が揮われた。「感謝と感激と」が籠められた第 16 巻から、悲嘆と追悼が籠る第 17 巻を経て、新「同人制」のもとでの「新年号」たる第 18 巻へと、どう展開してゆくか。

【附記】

本稿は、2024 年度科学研究費基盤研究（B）（一般）「近代日本の「老い」ゆく場と人びとの生をめぐる歴史研究—療養所と寄せ場から考える」（研究代表者一橋大学大学院社会学研究科石居人也）の成果のひとつである。

すでに発表した「＜資料紹介＞シリーズ『青松』を読む⑬手づくりで故人を偲び、戦後の新生を期し、風流と諧謔の詩歌に親しむ」（『滋賀大学経済学部研究年報』第 31 巻、2024 年 12 月発行予定）と「同シリーズ⑬' 第二次世界大戦後のハンセン病をめぐる療養所における「新日本建設」への思索」（『彦根論叢』第 442 号、2025 年 1 月発行予定）に、本稿はつづく。